

日本とノースカロライナ州の小学校の交流を進めるために —学校紹介と授業観察を通して—

鳴門教育大学学校教育学部附属小学校 教諭 松永健治

(1) はじめに

国際理解教育の柱の一つとして、本校では、外国の小学校と交流をもつことを考えている。今までにも徳島市在住の外国人や大学の留学生との交流会を行ったり、書籍やインターネットで諸外国のことを学んだりしてきたが、①子どもたちと同年代の外国人との交流をもつ。②外国語（英語）を用いた交流のできる環境をもつ。の2点について課題を残していた。そこへ、グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトに参加する機会をいただいた。プロジェクトの目的に学校間の交流促進も挙げられており、滞在中に、米国のノースカロライナ州の小学校と交流をもつきっかけができればと考えた。そのために、本校の学校紹介の準備を進め、少しでも多くの情報を現地校へ持ち込むことを考えた。また、現地校の授業観察や教職員との話し合いから情報を収集し、本校の教職員や子どもたちに伝えるようにした。今回のプロジェクトの参加が個人研修に終わってしまわないよう、双方の学校、教職員、子どもたちみんなが学ぶ機会をもつことができると願っている。

(2) 研究の概要

① 出発前の準備

交流先の小学校に、鳴門附属小学校の情報を多く伝えるための準備を進めた。また、事前学習会で、OHPとVHSビデオデッキの機器は、どこの学校でも用意に入手できるとの説明があったので、それにそって準備を進めた。全部を紹介できるわけではないだろうが、以前に私たちが留学生を招いて交流会をもったときに、私のクラスの子どもたちが興味を示したような事柄を想起しながら準備物を選んだ。ただ、交流先の学校名が明らかになったのが3月に入ってからであったので、相手の意向も聞かないまま、こちらの一方的な判断で準備を進めた。交流先の学校に少しでも多くの情報を持ち込めば、それだけ今後の学校間の交流のパイプが太くなると考えた。

(i) OHPシート

鳴門附属小学校の校舎や運動場、教室、特別教室などの写真を始め、卒業アルバムから体育大会、修学旅行、卒業式などの諸行事の様子や管理職の顔写真をパソコンに取り込み、それぞれに英語の解説を加えたシートを作成。カラーレーザープリンターでOHPシート（1シートに写真6枚を掲載）に印刷し、学校施設3シート、学校行事2シート、授業風景2シート、管理職、1年2組（松永学級）の一日、算数授業（専門科目）、日本・徳島地図各1シートの計11シート（写真60枚分）を用意した。さらに、OHPシートと同じ物を印刷物として3組用意し、交流先へ手渡す予定。

(ii) 折り紙

折り紙（Paper Folding）を通して、日本の子どもたちの遊びを伝えたいと考えた。「かぶと」や「つる」の折り方を絵本からOHPシートに写し取り、説明に用いる。折り紙は合計300枚を鳴門附属小学校からのプレゼントという形で持参し、現地校での学習活動兼プレゼント用に使う。「かぶと」と「つる」は難易度が異なるので、子どもたちの反応によって使い分ける予定。

(iii) ビデオテープ

学校紹介のためビデオテープを作成。朝の登校風景から休み時間、授業風景、給食、清掃、下校などの1日のくらしを記録。また、音楽で共通点を見出したいと考え、授業で使っている歌の本からアメリカ民謡と書かれている歌「ごんべえさんの赤ちゃん」「アルプス一万じゃく」「森のくまさんの」の3曲を選んで合唱をしたものと、鳴門附属小学校の校歌を撮ったものを紹介する予定。

(iv) 漢字の絵図

漢字の成り立ちを紹介するため、山、川、口、月、日などの象形文字を、それらの成り立ちにそって絵や図で表したものを用意。漢字クイズに使う予定。

(v) 阿波踊り

本校に留学生を招いて交流会をしたときの経験から、言葉でのコミュニケーションがうまくいかない場合でも、歌や踊りで交流を深めることができるということが分かっていた。そこで、阿波踊りを現地の子どもた

ちに披露しようと考え、密かに踊りの練習を重ねた。
また、踊りのテープと踊り方を紹介した絵（本校の6年生が阿波踊りについて学習したときに作成した物）も持参。

② 交流先の情報収集

交流先の学校規模や教職員数、場所、連絡方法を知りたくて、インターネットで調べた。コーディネーターからノースカロライナ州の学校を検索できるサイトを紹介していただいた(3月13日)のが役立った。<http://www.dpi.state.nc.us/internet.resources/ncschools.html>

そこから、訪問先だと紹介のあったJones Primary Schoolを探したが当初見つからなかった。2回目に気付いたことだが、正式名称が Ira B. Jones Primary Schoolであったので、見過ごしてしまっていたのだ。HPアドレスは、<http://www.asheville.k12.nc.us/Jones/>

学校名 Ira B. Jones Primary School Asheville,
North Carolina

住所 544 Kimberly Avenue Asheville, NC
28804 Phone:(828) 255-5366

校長先生 Principal: Mrs. Bonnie Hughes

ホームページを見て気付いたのが、We Specialize! Ira B. Jones Primary School is the only K-3 primary school in the Asheville City Schools System. 幼稚園から3年生までの学校であるということだった。私たちの学校は、1～6年生までいるので、①子どもたちと同年代の外国人との交流をもつ。という目的が達成できないことが懸念された。同ページの下にリンクのはられていた William Randolph Elementary Schoolを見て、Grades:4-5の学校(4・5年生の学校)と知り、初めて Ira B. Jones Primary Schoolと William Randolph Elementary School が兄弟姉妹校で、私たちが交流を進める上で両校とのおつきあいを希望しなければならぬということも分かってきた。このことが分かったのが3月15日。出発の9日前であった。HPアドレスは<http://www.asheville.k12.nc.us/Randolph/>

学校名 William Randolph Elementary School
Asheville City Schools

住所 90 Montford Avenue Asheville, NC
28801 Phone:(828) 255-5359

校長先生 Principal: Mrs. Barbara W. Lewis

3月16日にJones Primary Schoolあてに下記の内容のエアメールを送った。

Dear Ira B. Jones Primary School Children and the staff,

Hello! My name is Kenji Matsunaga.

I'm a Naruto University of Education Attached Elementary School teacher.

I will visit your school from 28th until 31th in March. I am looking forward to meeting you soon.

Kenji Matsunaga

My E-mail address: matsu@naruto-u.ac.jp

3月24日午前11時

コンタクトパーソンのバットフィリップスさんからE-mailをいただいた。大阪へ出発する1時間前のすべり込みであったが、彼女のメールを受け取り、私は喜びと安堵感でいっぱいであった。下記が、彼女からのE-mailであった。

Dear Mr. Kenji Matsunaga,

I am Pat Phillips, Guidance Counselor at Jones Primary School in Asheville, NC. I will be your host Mar 28-31 when you visit our school. I was honored to be in Hiroshima last summer as part of the Global Partnership. We are looking forward to welcoming you to our state and our school. Our students are very excited to have you come. They have learned a few words in your language and will be very proud to show you what they know. I will meet you on Sunday at Western Carolina University.

Sincerely, Pat Phillips

それに対し、急ぎ私も下記の返信メールを送り大阪に向けて出発した。

Dear Ms. Pat Phillips

I am Kenji Matsunaga. Thank you for your mail. Now 11:00 in the morning of 24th. I will leave my home 12:00. And we will go to Osaka. Tomorrow we will leave Japan. Very good time your mail.

I prepare photographs and OHP sheets, ORIGAMI, AWA-dance, and so on. I am looking forward to meeting you and your school staff and students soon. Thank you.

Sincerely, Kenji Matsunaga,

3/31(金) 8:00	Ira B. Jones Primary School	Arrive at Jones Mrs. Powers, Physical Education	同上
10:00	Asheville Middle school	ハント知事の懇談会に出席	
12:00	William Randolph Elementary School	Mr. Neal Compton, 5th grade 算数教材・教具について Mr. Marsha Jackson, 4th grade 算数「長さ」の授業参観 BLACK HISTORY MONTH Visit with Special areas	William Randolph Elementary school 90 Montford Avenue Asheville, NC 28801 828-255-5359
15:00			

④ 学校紹介と授業観察の実際

i) ~ vii) (ジャーナルから抜粋)

ここでは、主に学校紹介に関わる部分をジャーナルから抜粋した。事前に要した準備物などを用いての紹介であった。

3月28日(火) 訪問先 Ira B. Jones Primary School

i) OHPシート

3年生にOHPシートを使って、鳴門附属小の学校紹介をした。子どもたちからは、給食や掃除のこと、学校行事のことなどの質問が出た。本時は、テレビ局と新聞社からの取材もあった。

ii) 折り紙

3年生に折り紙(Paper Folding)でかぶとをを教えた。子どもたちのほとんどは初めての経験であったが、20人の子どもに対して2人の担任・カウンセラー・通訳・私の合計5名のチームティーチングによって全員完成した。先をそろえて折る活動が難しそうだった。また、Like this? I need help. など日本の子どもたちと同じような発言も子どもたちから聞いた。

3月29日(水) 訪問先 Ira B. Jones Primary School

iii) 質問

1年生のクラスではQ&Aの授業をした。どんな花が好きか? 食べ物? 車? 日本の家は? 子どもたちはおとなしいか? 数の数え方、消防車や救急車を呼ぶときはなどの質問が出た。日本の家は、玄関で靴を脱いで入ることや、119で救急車を呼ぶことを知らせると、アメリカは911で呼ぶのだと教えてくれた。

iv) 漢字

日本の文字についての質問を受けたので、漢字「山」と「川」を紹介した。また、私の名前(Kenji Matsunaga)を漢字で書くとどうなるかの問いに対し、松永健治と書いて、松永はFamily Name、健治はFirst Nameと

説明を加えた。姓と名の順序が日米で異なることに子どもたちは驚いていた。

v) ビデオテープ

2年生の教室で鳴門附属小のVTRを見せた。私のクラスの子どもたちが歌った、アルプス一万じゃく、ごんべえさんの赤ちゃん、森のくまさんが、それぞれ、ヤンキーードゥードゥル、John's Brown's Baby, Sippin Cider Through A Strawと呼ばれているアメリカ民謡と同じメロディーだということが分かった。メロディが同じであることに驚いていた。上の3曲がアメリカ民謡であることを調べて自学級の子どもたちに歌わせたのがよかった。

また、給食を自分たちで準備することや自教室を掃除することが不思議な様子であった。

子どもたちが学んでいる教科は似ている。低学年に生活科はなく理科や社会がある。宿題は月から木まであり金曜日は出さない。5日制だからだそうだ。校歌の紹介もした。

3月30日(木) 訪問先 Ira B. Jones Primary School

vi) 折り紙

3年生に折り紙(Paper Folding) & 鳴門附属小学校紹介(VTR)の授業を行う。折り紙は、クラス担任の希望で、紙飛行機にした。完成しても、安全のため教室では飛ばさせず、家へ持ち帰ってから飛ばすようにという担任の指示。未然に目にあたるなどの事故を防ぐための判断だそうだ。

3月31日(金) 訪問先 William Randolph Elementary

vii) OHPシート

先生方にOHPシートを使って、鳴門附属小の学校紹介をした。日本に来たことのある先生からは、学校の規模などの質問を受けた。

viii) ホームページ

メディアセンターでは、インターネットを使って、市内の学校のHPを検索していた。

パソコンの画面をプロジェクターでスクリーンに映し出していた。そこで、鳴門附属小学校のHPを紹介させていただいた。日本語の部分は文字化けしてしまい分からないが、写真等の張り付けている部分について問題なく見えた。

(3) 研究の結果と考察

Ira B. Jones Primary School と William Randolph Elementaryの訪問では、準備物を用いて学校紹介をすることができた。残念ながら最後まで阿波踊りを披露する機会がなかったが、今後の子ども同士の情報交換の中に位置付けられていくことを期待したい。

学校紹介をして分かったことは、やはり教壇に立ってみないと得られない情報があるということだ。もちろん授業参観だけでもNCの教育制度や、先生方の授業方法・生徒指導の在り方の多くを知ることはできたが、参観者としてだけではなく、授業者として子どもたちと接する機会を持ててよかった。何故なら、子どもたちや先生方が、私から何を知りたがっているのか、私の持参した情報の何に興味を示してくれたのかという生の反応を得られたからである。彼等はNCと日本の小学校の異なる点にも似ている点にも興味を示した。また、当然のことだが鳴門附属小のことだけでなく、日本の習慣や家・車などへの質問もあった。彼等の興味を考慮した交流を今後行っていくと良い。

(4) 今後の展望

現在Ira B. Jones Primary School と William Randolph Elementaryの先生方とE-mailの交換を通じて、学校間交流の話を進めている。

エアメール、E-mail、FAXと連絡手段は複数用意した。子どもたちの作品やビデオレター、写真などはエアメール。先生同士の通常の連絡や写真（JPEGタイプにして添付）などの交換はE-mail。急ぎの連絡などには直接相手校へFAX送信。と使い分ける予定である。

すでに、鳴門附属小学校の校舎増築にかかわり地中から発見された300年ほど前の武家屋敷跡の写真がE-mailに添付してPatricia Phillips先生に送付（5月10

日現在）。実際に子どもたちが遺跡に立ち入っての学習を予定しているので、それらの様子も引き続き伝える予定。また、NCの学校が5月末から8月上旬まで夏休みにはいるので、取り急ぎ学級写真などをE-mailに添付して送り、5月末までに交流の基本形を作っておきたい。

さらに本校では、国際理解教育の一環として英語の学習を行っているが、私のNC報告を聞いた子どもたちからは、手紙のやりとりや学校紹介の希望、相手校への質問などが出てきているので、英語教育と絡ませた学習を進めたい。具体的には、自己紹介（私は、○○です。）や学校紹介（これは、○○です。）、学習内容の紹介（図画工作の作品の簡単な説明）を英語で行う。また、ビデオレターを用いると、動きのある情報を送ることも可能である。これらを相手校に送付し、それを受けて、先方から返事などがもらえたら、私たちにとって最高の学習になるであろう。課題であった

①子どもたちと同年代の外国人との交流をもつ。

②外国語（英語）を用いた交流のできる環境をもつ。
の2点が解決されていくであろう。

(5) おわりに

私がIra B. Jones Primary School や William Randolph Elementaryを訪問した瞬間から既に国際理解教育と学校間交流は始まっていたのである。私のもたらす情報は、彼等にとって貴重な学習材料になるし、立場を変えてみても、外国人が学級を訪問すること自体またとない機会となったであろう。だからこそ、自分が、彼等が欲している以上の情報をもたらしてやろうという気持ちをもって学校紹介の準備をして訪ねていくことが大切であると感じた。相手のことを知りたければ、まず知ってもらうことから始めるのが、長いおつきあいをするために必要ではないだろうか。

最後になったが、私がIra B. Jones Primary School とWilliam Randolph Elementaryに滞在していた間、コンタクトパーソンのPatricia Phillips先生と、通訳のクランメル房子さん、石川美樹さんには大変お世話になった。私が多くの経験と知識と友人を得ることができたのも彼女たちの支えがあったからである。心から感謝したい。

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト 米国現地研修ジャーナル (2000年3月24日 - 4月6日)

徳島県立鳴門第一高等学校 教諭 稲井 一雄

3月25日 (土)

アッシュヴィル・グループは、大学のバンに乗せられてアッシュビル空港より西へ約40キロメートル地点にある宿泊地、カロウィーへ向かう。

道路が、西にゆくに従ってどんどん上る感じで、傾斜している。ちょうど、徳島県的那賀川の溪流に沿う驚敷ラインを遡るような感じである。

パルプ工場、病院、公務員、大学職員、マーケット等があるが、産業面で特別にこれという特徴がない。盆地らしきところに集落を作っている。24時間の店もあった。本当に24時間か。

途中、Tuscola HS, Jonathan Valley ES, Smoky Mountain HS などがあつた。

Western Carolina University のキャンパスは広大である。Cullowhee の町も広大。Western Carolina University のキャンパス内のMadison Hall に泊まる。

《考察》

海拔は相当あるが、それを感じさせないのは、地質が占いからであろう。道路は川に沿って傾斜している。水の便は良い。そうしたところは、取り立てたレジャーも何もないから地元民と学校とのつながりは密に違いない。経済的には豊かではない。交通は不便。

Tuscola HS, Jonathan Valley ES は、Haywood county で、Smoky Mountain HSは、Jackson county Sylvaにある。Haywood countyは、Jackson county の東で、Ashevilleの方にある。

アメリカでは、陸の孤島であろう。ニュースも町中と違って伝播してゆかないところ。フォーク・ムートを開催するのは、そうした位置の特殊事情が帰因している。そうした中での経済発展の基盤は、質の高い労働力を生む学校教育と激動する国際社会の流れを見据えたグローバルな視点と人々は考えている。学校教育が期待されている。

3月26日 (日)

(1) 朝食をレストランで取る。コーヒーは何倍でも飲む。人々も日曜日なので家族連れで大勢来ている。

チップは15パーセントでテーブルに置く。レジでは、代金の他、税金も払う。

WCUのLois Petrovich-Mwaniki (ロイス・ペトロヴィッチ・ムワニキ)教授がバンを運転して連れていってくれる。昨日も運転してくれた。

(2) 開拓村へ行く。丸太小屋造りで、約100年前の道具があつた。牛小屋、鶏小屋、母屋、鍛冶屋、牧場などを見る。母屋に咲いている黄色い花が美しい。名前はすぐ忘れた。

(3) Cherokee 博物館へ行く。インディアンの保護地域。インディアンの歴史がわかる。インディアンの部族も地域によって違い、文化も違う。鎌、吹き矢、槍、石斧などの展示を見る。白人文化を吸収して、生活様式も変化していく。Cherokee族は比較的抵抗をしなかったため、土地に留まり、ここでは相当の艱難辛苦を強いられたことであろう。今では、カジノを経営したり、みやげ物店で民芸品を売ったりしている。Cherokee族のアル中率が高いことを聞く。

(4) 夜はレセプション。スポンサーは米日財団。

歓迎を受ける。司会進行は、ロイス・ペトロヴィッチ・ムワニキ教授。日本の茶道の紹介をして、隣が司会をしているムワニキ教授の旦那さん。私のホストファミリーとなるべき方もおられた。WCU の大学の関係者や西地区の米の新旧の派遣の先生方も来られていたようだが、顔がよくわからないし、事情が飲み込めないしで、ほとんど話ができない。日本人の留学生が一人いて、誰かの通訳をしてくれる。誰か知らないが、一クラス何人かとか、日本の教師の仕事などを聞いてきた。ジャマイカ出身のWCUのマスターコースの学生さん(後日、ローリー移動の運転をしてくれる。)もいた。

ディナーで4番テーブルに座る。ロイス教授の旦那さんのムワニキさんが日本の先生は給料がいいでしょうと笑って言った。それで「まあまあ」と答えた。

WCUのJohn Bardo 学長、ノースカロライナ州議会のPhillip Haire議員、Sylva市長のBrenda Oliver (女性であった) さんから祝辞。

WCUの聖歌隊のコーラスを聞く。黒人学生ばかりだった。それで、WCUは国際色豊かな大学であると想像した。

WCUのJohn Bardo学長さんからメンバーの一人一人に写真が贈られる。このあたりの風景で一人一人違っている。

《考察》

朝食をレストランで取った時、日曜日なので、朝食を家族連れでというのは、さすがアメリカらしいと思った。日本では、昼食をデパートでというのは考えられても、朝からではない。日曜礼拝に行く前なのか、家庭サービスなのか分からない。

WCUのLois Petrovich-Mwaniki教授は運転を昨夜遅くまでしてくれたし、今日も観光案内してくれる。家庭の主婦でもあろうし、夜のレセプションはちゃんと司会もするので、きめの細やかさに加え、タフさに驚く。

インディアンの保護地域へ行ったが、どうも白人社会の優位の中で閉じこめられた貧しい生活をしている感じがする。文明的な生活が、農耕生活、狩猟生活、共同生活を淘汰してしまった。どうして彼らなりの生活を保障してやらないのかと思う。また、彼らも白人文化の前に誇りを失って墮落したのではないかと思う。みやげ物屋やカジノなどの産業生活は、白人経済に合わそうとするため、貧しさはいなめない。これはアメリカのみならず、アボリジニのいるオーストラリアでも感じた。もっとも、白人による森林開発がされ尽くされているので、自然のままの生活は無理であり、自然保護をしても遅い感がある。我々文明社会に生きる者は、インディアンの文化に学ぶべきものがあるに。

WCUの大学も、各国から留学生を受け入れ、学生の人種構成も複雑なのであろう。山間部の大学であるのに国際色豊かなのを不思議に思った。

アメリカ人は、日本人教師の給料が高いとみている。また、クラスの生徒数は40人で多いということを誰かに聞いて知っている。

3月27日(月)

(1) NCCAT見学(聞き取り)

州より予算が出る。ノースカロライナの公立学校の教師のリニューアルのための研修施設。Cullowheeにある。寮で1週間宿泊しながら研修する。1983-84年

にTeacher of the Yearに選ばれたジーン・パウエルという教師の発案。教育熱心なハント知事が後押しした。

一週間単位で、セミナーを組む。90セミナーがある。年間4500人が研修。博物館、美術館(50万ドルをかける)を兼ねている。情報センターでe-mailなど、24時間可能。また、コックさんのいる70人収容の食堂(3食である)もあるし、また、24時間のジムもある。1日2回のおやつも出る。セミナールームとカーテンドアで仕切られた小セミナールーム、スクリーン、テレビ、いろいろな形態に変形できるテーブル、ホール、図書館など単なる研修場所ではない。

このような建物は4州にしかない。他州の教育関係者が見学に来る。25州がそうした施設を望んでいる。

講師も、ハイスクールや大学関係者やありとあらゆるスペシャリストを講師に招く。免許や著作や自営業など、様々に判断して契約を結ぶ。

Teacher of the Yearは、カウンティ・州レベルで、教師の技術、熱意、成果を競う。100カウンティ、地方から州へと進み、最終判断する。

体験的、実地的な学習を重視しているが、州の学習指導要領に基づく。

アメリカの教育システムは州毎に違う。東から西に移動し、似たところも互いにある。トップダウン方式。

学校の目的について。社会知識を学ぶことと、社会の創造や改善のためであるが、どっちかと言えば、社会知識を学ぶことが75%ぐらいの感じ。

14-17歳の在籍率であるが、1930年は、51.4%であったのに、2000年では、100%近くである。ただし、卒業率は72%である。また、70年代に比べ、白人の卒業率が低下してきている。黒人は相変わらず低い。また、ヒスパニック系が増加している。

アメリカでは教室を受け持つ教員は半分ぐらいで、後は間接的に教育に携わる。

カリキュラムについて。Hidden(書かれてはないが、日常的に教えている、手を挙げる、静かにするなど、合意的、暗黙的なもの)、Extra(特別活動)、Formal(教科)の三種類がある。

生徒の学力は、学年があがると、アチーブ成績で平均以上が少なくなっていく。コンピュータのアクセス能力は高い。

Special Needsとして、障害のある児童の指導。グループワーク、活動主体、課題の適合、長さ、能力に

合わせた授業、文字情報だけでなく、視聴覚を使用する。環境面や評価の仕方も大切。

《考察》

ノースカロライナ州は、教育熱心な州であるのは、NCCATの存在でも裏付けられる。

教員研修センターなどは、日本ではどの県にも定期的に研修する場所としてあるので、全員の教師の均質な向上を期待する点ではよいが、アメリカのような多様化した授業を支えるためには適していない。また、教員の研修も新任研修で宿泊するが、集団訓練的な意味あいを持っていて、時代のニーズや個人の要望、個性の伸長にはならない。

宿泊施設は1週間研修に専念するために設けられたものであって、多様なセッションが設けられ、講師も各界から選ばれ多様である。また、そのための快適な環境づくりもなされ、研修施設が州の文化の殿堂ともなるよう、多額の費用(50万ドルをかけ)を使用して、美術館、博物施設となっている点など、集団訓練ではなく、個人個人のニーズにあった施設として日米間の発想に開きがある。

(2) Fairview Elementary見学

幼稚園より8年生まで。玄関に作品を飾る。学級数は、5年生のクラスを見たかぎり、24人だった。1～2年生全体で200人。1～2年生のクラスは23人、3年生26人。もっと下げようとする動きがある。

壁がない教室、オープンクラスにしている。各教室の雰囲気伝わってくる。

WCUの学生のインターンが補助をする。10人いる。一年間。指導教師がついている。一週に4回。大学の先生がやってきて、ここでも授業をする。

校長先生の話。スライド使用。野外環境プログラムに力を入れる。8年前、イギリスの学校訪問の際にヒント。同じ事がやってみたいと思った。同じ考えの教員が校内にいた。

最初起伏に富んだ敷地だった。整地ならしを保護者がした。どんな理科の授業を教えるかをコミュニティの人々に知らせた。先生方とも協議した。いろいろな機関や国立公園の視察を行う。教師がまず学ぶこと。子供たちが遊歩道を作りながら、どういった野外のステーションをつけるかを考える。5歳の園児の参加。小さなバケツを持つ。保護者と一体になって改善しようとした。8年生が問題点を書いて教育委員会に訴え

た。人工池を保護者がした。2年生がどんな生物が川にいるかを観察して記録を取る。5年生と幼稚園児と一緒に作業。鳥が繁殖するための環境づくりをした。

メディアセンターには双眼鏡、本、顕微鏡などの関係教材が置かれている。

グローブ・プロジェクトという7学年の理科の授業を参観した。水質や気温など、世界中のデータを集めて比較する。インターネットでデータを処理するところを見学。

ホールで、ダンスの授業を見る。私たちが混じって一緒に踊った。

《考察》

校長のリーダーシップのモデルを知った。次のような手順や意図が理解される。

- ①校長が構想を抱く。
 - ②賛同し、核となる教師が存在する。
 - ③コミュニティの人々に構想を知らせ呼びかけて協力を要請する。
 - ④学校内での協議やモデルとなる施設の見学など、まず教師が学ぶ。
 - ⑤予算など、学校経営の一端を児童生徒にも認識させ、教育委員会へ教師と一緒に運動させる。
 - ⑥野外の人工ルートはどこにどのような施設を作るか、生徒に模索させながら体験させる。
 - ⑦上級生が幼稚園児を助けて作業することによって、思いやりや協力心を意図している。
- つまり、校長がリーダーシップをとりつつ、教師、児童生徒、地域の人々が一体になって、さまざまな教育的価値を含みながら体験的創造的に新しい環境を実現させている点が参考になる。

(3) スモーキー・マウンテン・ハイスクール(見学)

二つの学校が合併して1989年に創立。ランが校内に走っている。電気トラックを見る。ミュージカルショーの練習をしている。英語のクラスに大学生のインターンがいる。1月から5月までフルタイムである。

教師は1日に90分を3回教えるのが標準。生徒のいない時間が1コマある。準備に当てる。9～12年生。教師が教室を持ち、生徒が来る。

全体で941人。違ったレベルのクラスを開設。グレイドを1～4。

卒業要件は単位数が定められている。大学進学のためにはそれぞれにふさわしいコースの教科取得要件が

ある。

修学旅行はないが、最終に作品化する目的で世界の文化を知るため、40人でワシントンDCのホロコースト・ミュージアムに見学に行く。

双方向のテレビ会議システムのラボがある。

進路室に生徒の検索用のコンピュータがある。新入生のガイドはカウンセラーがする。各学年にガイダンスカウンセラーがいる。

職業セッションでトレーラーを制作。4台あり。さらに3台作る計画。10年生11人。

化学で黒板を使用しない。実験している。

美術のクラス。本を参考にしていた。

各教室に備え付けの備品がうらやましい。

ビジネスクラスは、より具体的な設備。ホスピタル・ルームあり。

図書館は2万冊。分類は、Dewey Decimal Systemである。先生からCurutural AwarenessをHealth careで教えてくれという。生徒は40人。9、10年生対象。Hess先生とFisher先生の臨時合同クラス。

《考察》

学校現場が大学の教員養成システムに取り入れられ機能している。長期にわたり大学生を教員養成の場として提供し、現場のベテランの教師から指導を受けるし、教授が現場へやってきて教えるという。また、現場の教師も大学の単位の取れる科目を教えるというふうに、双方向に現場と大学とが協力し合っている。

校内には、ランが走り、双方向のテレビ会議システムがあるし、生徒はいつでもインターネットが利用できるようになっている。コンピュータの利用が日本よりはるかに進んでいる。

どのコースもまじめに学習内容に取り組んでいる。高度なクラスはとことん高度な学習内容である。アメリカの学校は、授業すなわち、学習がすべてであるため、そのためのマネジメントが教師の最大の仕事であると思える。生徒は、特に学習のみに専念するように、教室毎の規則や見えざるカリキュラムでしつけられている。生徒は授業中気が抜けないので、学校とは厳しい場所にちがいない。

しかし、その反面、多様な選択教科や選択幅があって、生徒は、自分の能力に合ったクラスや進路にあった教科構成を自主的に選択することが出来るため、のびのびとした明るい授業も見られる。

(4) Fairview Elementaryの先生の誘いで夕食を取る。Tammy Bates (Tuscola HS) 先生の話は手厳しい。日本の学校の居眠りは米国では指導対象となり、遅刻欠席も6回までという。

《考察》

日本の教育はたくさんの指導を抱え込み、学校本来の学習指導そのものがおろそかになっている傾向がある。アメリカで居眠りに手厳しいのは、学習本意に考えているからである。日本の場合、教科の選択幅が比較的少なく、個人のニーズが満たされないわけであるから、学習ができないからといって、落第させることが出来ないという事情がある。また、居眠りと他の規則違反と同じにする下地ができていない。日本の規則違反は学習の取り組みにつながった規則というより、全体の風紀を乱す恐れがあるのを阻止するというねらいが強い。そのため、居眠りがよくないと考えるのは同じであるが、教師はそれのみに関わっておれないという事情がある。どうしてもアメリカの教師に理解してもらえない点である。

いけないとされることがユニバーサルでありながら、学校教育システムの違い、もしくは欠陥から解決し得ない事情がある場合に、異国間で理解されないのかもしれない。

3月28日(火)

スモーキー・マウンテン・ハイ第1日目。

第1時限

(1) Salzano 先生 英語

生徒26人で、形態は真ん中を境に学習者が向かい合う形。

宿題点検をし、見直しの2分間はミュージックを流す。先生は机間巡視している。

すでに課題の出来てしまっている生徒がいる。

書き取りは、教師が単語を読み上げる。教師は一人一人に声をかける。教師は声を大きくしたり小さくしたりして説明している。生徒は単語を書き取り、単語の定義を書く。服装はまちまち。男子生徒が女子に答えを聞こうとしていたが、私たちがいるのでそれができなかった。質問の生徒は手を挙げていた。先生はそれに答える。同じ教室であるので掲示がおびただしい。ここの先生はアイデアが豊富と見た。答え合わせの時、生徒の返事が小さかった。

《考察》

服装はまちまち。生徒数は26人で人数が少ない。教師は一人一人の生徒の能力が把握できる。教室は教師が動かないから、教室には教室の年輪ともいえるべき指導上の環境が整っている。掲示物は工夫を凝らして多い。ワーキングシートを使用している。カラー紙二色を使用していた。教師も自分のなれた教室を動かないので、指導のみに専念できる。指導方法を工夫し、視聴覚を効果的に使用し、机間巡視をして、生徒一人一人に声をかけ、個々に合った指導をし、個々の能力を把握できる。指導の一貫性が保て、技術を磨くことに専念できると思う。

しかしながら、教師は、生徒が極端に入れ替わったり、環境を変えられると、新しい指導の工夫にとまどうのではないかと。マンネリ化の恐れもある。それで研修が必要になるのであろうか。

生徒も学習によく取り組んでいる。黒板を使用しなかったが、アルファベットの便利さを思い知らされる。日本語では、漢字を黒板に書いてやらなければわからないが、アルファベットなので、口頭ですむ。なぜか、印象的だったのは生徒が小声だったことである。学習に専念するためか。意外だったのは、日本と同じように基礎力定着の学習であったことである。試験タイプの学習法である。生徒間の実力の差も存在する。

(2) Henderson先生 フランス語

生徒21人、生徒はフランス語で挨拶する。

OHPを使用しているため、暗い中で生徒は書き取っている。

口で言いながら書いている。繰り返し唱和している。教師がOHPに書き込んでいる文字が小さい。

小文を書いている。仏作文である。大学2年ぐらいのレベルであると思う。2人隣同士で直し合っている。日本語を教えてほしいとのこと。

矢野先生と挨拶を教える。

おはよう

ありがとう

ごめんなさい

さようなら

私はあらかじめ作成していた指導案の oasis で教える。

「どうもどうも」を付加してそれまでの事柄を忘れても、「どうもどうも」で間に合うように説明しておいた。

後で「どうもどうも」は反響があった。生徒は私に会うと「どうもどうも」と言ってくれる。

《考察》

学習指導を通したしつけができています。あいさつ、口で発音しながら書いたり、唱和するといったこと。熱心に教えているし、生徒も熱心である。

二人で直し合う方法を採用。英語はアルファベットであったが、フランス語は発音が違うし、さらに母音が増え、記号が出てくるため、口頭で言えない部分もある。それでOHPを使用しているのか。

OHPはどうしても暗くなるので、衛生的にはよく無いなと思う。日本では、近視の生徒が多く、養護教諭が教室の輝度を年に一度測っている。

(3) Lewis先生 スペイン語

ビデオモニターを見ながらスパニッシュのダンスをしている。挨拶をスペイン語ですてくれる。20人中3人はダンスせずに筆記作業をしている。ペンダーガスト先生がしばらくして呼びに来た。

《考察》

外国語を学習しているクラスでは、習った言葉を使ってお客さんにも挨拶するのはよいことである。普段そうしているであろう。

ただ、20人中3人はダンスせずに筆記作業をしている。生徒の中に学習よりダンスがいい者と、学習をしたい者とがいる。大部分の生徒はダンスを選ぶ方が筆記より楽であろう。ダンスはスペイン文化の理解につながるものであろうが、息抜きではないかと思う。

第2時限

(1) Barker先生 High School US

矢野先生が日本の様々な時代の風物写真をかかげて説明。私は日本語の挨拶。質問をよくする。しつけや謹慎についての質問が出る。

《考察》

質問をしてくれるので、質問を予想し、それを指導案に盛り込むことによって、授業に幅が出来るので、教師は教えがいがあがる。しつけや謹慎についての質問が出たのは一考を要するが、ここの生徒も学校の不満があるなと思う。

(2) Pendergast先生 College Level US History

自由に使ってくれということなので、記録できず。OHPで関空から徳島までのルートを説明する。時間が足りなかったため、端折る。質問をよくする。橋の長

さをたづねてきたので、用意していたものを使用する。

食事時となり、食堂へ行き校長先生と食事しながら話す。

みやげとか、学校要覧を渡す。

インターネットはどうなっているかという質問で、日本の学校はこれからだと答えた。校長先生は、日本の学校はハイテクが普及しているというイメージを持っていたと言った。

私は学習指導にとって機器の使用はベストの指導ではなく、大切なのは、人対人、ハート対ハートの問題だと答えた。彼は今後そうしたことを日本から学ばなければならないとおっしゃった。

その後、校長先生は食べかけたものをろくに食べずに、問題生徒のことでどこかへ飛んで行ってしまった。

第4時限

Taylor先生 産業テクノロジー

広い作業場がある。ホワイトボードや机椅子もあるが、使用してなかった。木工をしている。時計の枠、チェス盤などを作っている。風笛（風琴）を仕上げている。よい仕上がりである。生徒は熱心に取り組んでいる。旋盤も扱う。バッテリーが18個ある電気自動車に乗せてもらう。

《考察》

同じ学校に工業的産業的職業訓練的なコースがある。総合高校である。学習よりは作業を好む生徒が選択するという。産業テクノロジーの生徒は担当の先生に好感を持っていた。私たちが案内してくれた生徒が「Taylor先生はよい先生だ」と言った。「将来のことはわからない。」とも言った。その生徒もこの地方では将来に対する不安があると感じた。

《反省会》

とても疲労困憊しているので、聞き取りはうつろである。報告もあいまいになった。時差ボケである。

①盛田先生

ハンディキャップを持つ生徒に対する丁寧な指導。学校にはスペシャリストがいる。同じクラスで授業。

1972年にすべての人に公教育を受けることができるという法律が出来た。IQ60以上の者なら可能。50以下は特別施設。障害の程度や親の考えによる。

どの子にも愛情で接する反面、テストに通らないと切り捨てるふうで、高卒の資格にきっちりしている。

②宮本先生

いつのまにか授業が始まっているような感じがする。

70年代の後半から、Teachers' aidという制度あり。親のボランティア、学生のボランティアがいる。能力差や障害を克服させるため。

7年前より免許が取れる。国レベルで資格を取らせる制度がある。通ると俸給アップ。

[基準] 1) 5カテゴリー-3分野で。2) 指導内容 3) 子供理解 4) 地域の人の専門など。

自分の成果を写真に撮る。自分が教えた作品。成長過程。10分間の授業風景。そうしたものを提出し、州が試験を出す。

③花垣さん

オープンクラスについて語る。声が聞こえる方がよいという。周囲の雰囲気や伝わり、よい影響を与えるという。6年生は先生一人に学生一人のインターン。インターンは教えない。質問を受け、生徒を理解する。

《考察》

障害児の受け入れについては、背景に関連した法律がある。Teachers' aidは、家庭と学校の結びつきや教育への関心を強めることになるし、子供の能力差や障害の克服になる。また、教員の手薄を補える。また、民間の人々も教員免許を取る機会を与えることになる。

インターンの制度は、大学と学校現場との結びつきを深めているし、双方向の関係を持っている。

3月29日（水）

SMHSの2日目

第1時限

朝食。ペンダーガスト先生のお気に入りの店に車で連れていってくれる。店に行くまでにいろいろとアメリカの教師の事情を聞かせてもらう。給料が10カ月分支払われるが、長期休業中も彼らはちゃんと埋め合わせをしていたのでなぜか安心する。朝食であったが、私は朝からヘビーなものを食べてしまった。貧乏人であるから、肉みたいなものなら何日でも食べられる。

第2時限

(1) Bell先生 英語

12thの生徒 教室は4。

教室の設備は、ビデオ、OHPができる。

矢野先生のビデオ紹介。私はビデオ撮影。最後のクイズをして、矢野先生が勝ち残った生徒に賞品を渡した。生徒は授業終了後もらった賞品をBell先生の指示

でその教室へ返していた。いろいろな質問の中で、日本の学校には、生徒指導上問題はありますかという質問や、暴力の問題についての質問があった。いじめがあったとき、教師や親に告げると、後で仕返しをされるとこわいと言っていた。

《考察》

もらった賞品はその教室へ返していたのは、賞品を独り占めにしないという配慮か、あるいはまた、次の教室へそれを持ち込むことに問題があるためか。そこにしつけを感じた。

生徒はしつけや謹慎処分やいじめについてたずねてきた。生徒はルールで縛られている学校生活に不満を持っているのか、それとも、日本とアメリカとの比較をすることにより、自分たちの置かれている立場を考えてみたかったのか。

いじめがあることがうかがえた。どこも同じである。

いじめがあったとき、教師や親に告げると、後で仕返しをされるとこわいという意見に対して、私は、それでは解決にならないから、仕返しのないところまで指導すると言っておいたのだが、心の中では、どこも同じだなと思った。いじめは親や教師の預かり知らぬ所で起こるものである。教師には、いじめの陰湿さが想像できないときがあると思う。

(2) Stewart先生 Drafting Class (51 B)

10, 11, 12th Grade

マッキントッシュ 20台

製図の授業。正面・横・上を描く。主題は、Face Plateである。様々なモチーフを使用する。

一人の子が武道をやっていると言って話しかける。

プリンターはパソコン2台で共有。教師が質問に答える。ペーパーをこなしした後、実習にとりかかる。

ソフトは、Power Cadd (Engineering software) (Greensboro, NC) である。

課題を終えるとゲームをしている子もいる。

残り時間がなくなってきて一人一人の課題も終わった頃、ある生徒が私に話しかけてきた。手帳の字は日本語で書いているねと言う。それで、その子を前にして日本語には文字が三種類があることをホワイトボードで例で示して説明していると、他の生徒も集まって聞いていた。時間が来たが、教師が帰るのを少し制して聞くようにさせてくれた。

《考察》

ある生徒は、日本のイメージは武道であり、それで日本に親しみを感じていた。また、ある生徒は、日本語に興味を持つ生徒がいた。興味が何であれ、そのままに放置せず、すぐ満足させることの大切さを感じた。

第3時限

(1) Preston 英語 12th (8)

矢野先生との共同。記録取れず。

(2) Carnes 先生 コンピュータ・サイエンス (Programming)

ウィンドウズ駆動。PC24台。3つの学年の混在で、14人の10, 11, 12th Gradeである。やっていることが生徒によって違っている。

パスカル、C++、Excelなど様々なソフトでグレードの違う生徒それぞれに教えている。

先輩が教えるシーンもあった。ひとりC++でプログラミングをする、ずば抜けて優秀な子がいて、態度も落ちついていて、あまり出来ない子（最初からゲームをしていた）は、教師の近くに配置し、出来る生徒はやや離れたところに位置していた。

《考察》

人数は少ないが、学年の違う生徒が混在している。学年に関係なく選択制になっているからである。下級生は上級生の取り組みを目標にがんばることができる。また、互いに教え合うことや上級生は教師のアシストをすることができる。教えることも学ぶことである。

出来ない生徒は教師近くに位置させておくのはよいことだ。

また、部屋が広くなかったが、人数も少なく、学習の雰囲気は拡散しないのでよいと思った。

(3) バンド Franklin先生

残り時間わずかに10分程度という所へ行く。生徒は35, 6人いて、すべての学年が対象。

先生がすぐやってきてくれたので、私は「遅くなりましたが、見せていただけますか。」と言うと、先生はすぐ生徒の所へ行き、何か言ったかと思うと、生徒は楽器を取って、一斉に位置に就いた。Flashing Windsという名曲を演奏してくれる。

何か言わなければならなかったのですが、恥ずかしかったが、少し片言で感想を言った。すぐ、全員がしーんとしてよく聞いてくれた。

《考察》

教師が話そうとするとき、全員が一斉に静かになっ

た。しつけ、もしくは全体の規律がしっかりしている。バンド学習もうまくいっているということであろう。Flashing Windsそのものはよく知られた有名な名曲。大地に広々と広がるようなイメージで、すがすがしい思いにさせられ胸がすく思いをした。

バンド学習を通して、チームワークや規律や思いやりが学べるということを知った。

第4時限

Health Occupation Hess先生・Fisher先生

2クラスの合同だったので、40人程度いた。9th, 10th, 11th, 12thの生徒。

《指導内容》

"Difference of gestures"

- 1 Yes nod うなずき move head down
No shake one's head 首をふる move your head side to side
- 2 Bowing & shake hands
おじぎの度合い
丁寧さの度合いによって仕方が違う。3種類が考えられる。
15° 45° 90°
- 3 Physical distance
三尺下がって師の影を踏まず。
目上や教師にあまりなれなれしく近寄らないこと。
- 4 Suffix of one's surname -san
-kun
-chan

"Japanese mentality hidden in the conversation"

Situation 1 giving and receiving gifts

- A This is a boring thing.
B No, no. This annoys me.
A Oh, no problem. Don't say so. Please have it.
B Well, I'm sorry, then....
B Thank you very much. (Don't open)

Situation 2 self control/reservation

- A Mr/Ms ... Are you feeling better?
B I'm OK.
A Today, I'll give you new medicine.
B OK. I understand.

以上が指導内容。

様々な質問があった。以下それに対する答え。

- 1) 患者がよくないのにだいじょうぶですというのは

ナンセンスではないか。

文脈から判断すべきである。長い闘病生活で、医者によく患者のことを知っているのも、心配はない。苦しい答えである。

- 2) 先生を尊敬するということについて。

中国文化の影響であることを教える。古代中国には偉人が多くいたこと。

- 3) ガンの患者と分かったとき、どう取り扱うか。

母親の体験談を話す。涙ぐむ生徒がいた。

最後に、折り鶴を思いついた。日本人の患者には、一つ折り鶴をあげてはいかがですかと言って、鶴を折ってみせた。

- 5) なぜ折り鶴を患者に贈るのか。

鶴と亀は長寿でめでたいとされること。

授業後、鶴の折り方を教えてほしいという男子生徒が数人いたので教えた。

《考察》

日本の文化の微妙さを説明するときは、注意を要する。それに対する明快な説明を用意できない限り失敗する。次の、

- A Mr/Ms ... Are you feeling better?
B I'm OK.

これは、材料がよくなかったかもしれない。ありうることではあっても、滅多にないケースである。少し遠慮する習慣を伝えたかっただけである。そこには文脈が流れている事を知らないで受け取る危険性がある。長い療養生活をしていると、もうこれ以上どうにもならないという判断が患者にある場合で、医者は患者のことをよく知っていてちょっと打診している場面である。しかし、たいていは、よくない場合はよくありませんと日本人の患者も言うに違いない。I'm OK. などという患者はナンセンスである。

異文化の国で教える場合は、背景にある論理がしっかりしていなければならない。

授業には、状況に合わせてプランを変えなければならないことがある。最後の思いつきの鶴は効果的であった。後で、その授業を聞いた女生徒が図書館にいて、私に話しかけてくれ、鶴がよかったと言ってくれた。

WCUの校内にあるContinuing education and Summer Schoolの見学

ふらふらになりながら記録を取る。しかし、目で見

た印象は焼き付いている。

教員の研修は法律で義務づけられている。出張費は出してくれる。施設を貸すのは大学。

夏の5週間を利用して研修する。

資格は、各週各教科毎で、フルタイムの教師。校長に申請、大体は年功序列。

受講者は春秋とその後一回報告集会。シェアリング（一般公開）する。

公機関は無料。私営は一日200ドルをもらう。

自分たちでソフトを持ってくる。NCCAT よりもっとテクノロジーに力を入れる。

テレコミュニルームの見学。光ファイバーケーブルで、双方向でコミュニティコネクティングしている。

人口の少ない学校、十分な学生のない学校をつないで遠隔教育をする。少数のエリートにも有効。4つ以下のカメラとする。一画面に分割して複数を見ることが出来る。OHPも送れる。テストも送れる。

設備だけで1年に莫大な額が支払われている。天気が悪いときは、居ながらにしてテレビ会議が出来る。いろいろな教師を呼ぶより安上がり。クラスは少人数。大学レベルであるから高校生が多い。

帰りがけにマルコムさんの事務所による。手帳を忘れてしまう。困った。

《考察》

小中高の学校現場と大学との結びつきがあるのは、大学が教師教育の場を提供しているからであるのと、逆に現場が大学のインターンを受け入れ教育し、大学教育の場を提供している。双方向に協力し合っている。日本のように県教委だけで教師教育をするには、資金面で限界がある。巨額の資金を投じた施設でこそ充実した教師教育ができる。

3月30日（木）

3日目

第1時限

小野先生が来て通訳してくれる。生徒の言っていることがよく分かった。

(1) A. Pendergast 先生 英語 9th grade

30分間四季あてをする。OHPを使用した。

桜の花の映像で、何の花か分からないので想像できないという場面があった。竹の子の掘っている場面が少々薄くて分かりにくかった。独奏を回して見せた。

正月ということで。

俳句の説明をした。

作品4枚分を配るとき、紙が混乱した。

《考察》

四季については元々日本人の思いこみがあるわけで、教える際、そこを考慮しないと、相手は分からないで終わってしまう。日本人は伝統的に桜しか考えられない。ノースカロライナは四季折々の花が豊富なので、何の花か分からないのである。

俳句作品の中で一つ問題のあるものがあった。A.L.Tに見てもらっておいた方がよかった。

さらに配布物は、ちゃんとあらかじめ手を整えておくべきであった。これなども米国では教師の学習指導の評価基準の一つである。ちょっとはずかしかった。

(2) Sample 先生 英語 12th Grade

日本の四季あて。雪の覆った梅の花をうっかり冬と言ってしまったら、生徒の中にいやな顔をしている生徒がいた。しまった。失敗だ。頭が疲れて混乱している。

同様に俳句作品を配った。

《考察》

3年生は、1年生と比べて反応がゆるやか。「もっと高度なものにしましょうか」とSample先生に言うと、「3年は大人ぶってああいう態度をしているだけで、興味を隠しているだけだ」とのこと。一つ指導上のミスがあったが、これは許されないことであると思った。

時間の関係で、俳句作品を配っただけで、感想など聞いている時間がなかったので、無駄な気がした。

第2時限

(1) コーラス 全学年

発声練習に加わって発声をする。どこも発声練習は同じであった。2曲合唱練習。2曲目は練習が出来ていない曲とのこと。

形態は、小ホールのような所で、上に舞台があり、演奏する生徒がいた。舞台の下で、生徒たちは合唱の体形になるよう、雑壇が組んであって、先生は下中央で指揮をしていた。生徒のパートがちゃんと決まっていた。女子が場所を入れ替わってさっと男女がくっついて腰に手を回して歌っている場面を見た。曲はWitness (Arr. Jack. Halloran) である。

《考察》

生徒のパートが決まっていたため、男女は離れて立っ

ているが、中には男女の仲良しがいて、他の女子が場所を入れ替わってあげると、さっと男女がくっついて歌う場面を見た。最初の一曲目はパート位置に厳しく、一緒になれなかったということであろうか。

各教室での男女交際のルールはどのようなのか。

廊下でも男女がくっついて歩いているのを他の男子が冷やかにじゃましている場面があった。また、バスに乗る別れ際にキスシーンを見た。

いくら習慣であっても、いきすぎると、学習のじゃまになると思う。その問題はどのようにしているのだろうか。課題としておく。

(2) 図書館見学 David Proffiffさん Media Specialist
通訳に小野先生が来てくれる。

①分類

Decimal Classification

宗教が200に来て独立している。大学では、国会図書館分類法である。

②予算

- 3カ所からくる。1) US 連邦予算
2) NC州予算
3) ジャクソン郡

対象となるのは、書籍とソフト、ビデオ、テープなど。予算配分基準は生徒数による。小中高は同じ額である。ここは、生徒数950人であるから、約14,000ドルである。ただし、コンピュータなどの設置・改善費は別途である。

③利用について

Open schedule

- 1) 先生が引率してくる場合。カレンダーに時間を書き込んでいる。2クラスまで受け入れ。
あらかじめ予告してくれる方が用意しやすい。
用意すること。印刷物、コンピュータ、CD-ROM など。
- 2) 自由に閲覧したり、くつろぐ。
新聞、雑誌、インターネット（電子メール）、読書
- 3) 貸し出し
メンテナンス・チェックをする。
- 4) 録画
学習教材を作るということ。
- 5) 最高学年のシニアプロジェクトの支援。
卒業研究の結果を委員会で発表するとき、プ

レゼンテーションを使用するので、そのプレゼンテーションを支援する。

6) コンピュータの故障の解決。

コンピュータ研修を受けている。

司書（ライブラリアン）はメディアスペシャリストと呼ぶようになってきている。

読書指導について、高等学校では、好き嫌いがはっきりしているので、読書量を増やすという考え方には問題がある。

最大のニーズは、それぞれの先生のカリキュラムを支援するということ。

④購入について

- 方針 1) 賞を取ったもの。
2) 年間で先生からのリクエスト
3) 蔵書分類のバランスで、少ないものを入れる。
4) 責任者が最終的に判断する。

現在では、ジャクソン郡のメディアコーディネーターがオーダーの処理をしてくれる。それをもとに、必要なカード、オンラインカタログを作成している。

州でも学校図書館の組織がある。メディアサービスデビジョンである。CD-ROM、ソフト、本の推薦のリストアップをしている。

ただし、Davidさんは移籍してからまだ、3か月しか経っていない。

図書館内部のコンピュータはオンライン化しているが、学生のコンピュータはそうっていない。

図書館の本の分類が処理されていないものがあるので大変である。

American Library AssociationのブックリストやSchool Library Journalの書評やブックリストに推薦度を示す星マークがついているものを参考にする。

⑤評価

高校の貸し出し冊数は無意味。小学校はいいが、高校はいかにサポートサービスが出来ているか、その質が問題である。そのために決まった様式というものがある。

州議会は校長に委嘱しているのでは、校長に図書館業務を理解してもらうアピールが必要である。

⑥その他

コピーサービスする。生徒は10セント支払う。

第3時限

(1) M. Pendergast 世界史 10th Grade

前半、私が「もののけ姫」のビデオを少し。あらすじの一部を生徒に呼んでもらったが、さすがにすらすらと読む。「もののけ姫」のモデルをOHPで紹介。

その後、矢野先生のビデオ。

《考察》

M. Pendergast 先生の話で、生徒は「もののけ姫」を最後まで見たかったらしい。あのアニメの威力のほどが確認できた。作品のよさはすでに研究済み。

(2) Rice 先生 学校新聞 全学年

①作業内容

ウィンドウズ駆動。ページメーカーを使用して、編集する。レイアウトに紙がいない。カットは著作権のフリーのものを使う。写真はデジタルカメラで撮る。

分担作業で、レイアウト、インタビュー、写真を撮ること。記事を書くなど。

広告を取る。これは、金を取るのが目的ではなく、社会的な知識の習得としてする学習行為。

②発行回数

一ヶ月に1回。来月卒業であるから、卒業エッセイを取り上げている。

③教科の特質

単位として認められている授業の一。州テストがないのでプレッシャーがかからない。

④レディネス

コンピュータは5～9年のキャリアがあるから、特にコンピュータ教育、情報教育など、必要としない。

第4時限

A. Pendergast 先生 英語 (1時25分から2時55分)

9年生

指導内容

矢野先生との共同。

テーマは "Difference of gestures"

1 Yes

No

2 Bowing & shake hands

おじぎの度合い

丁寧さの度合いによって仕方が違う。3種類が考えられる。

15° 45° 90°

3 Physical distance

あまりなれなれしく近寄らないこと。

4 Suffix of one's surname -san

-kun

-chan

5 その他

日本の学校の部活動の話。

質問が多く続く。部活動の話は体育部で止まり、文化部までいかなかった。

さしみは血なまぐさいですかなど、いろいろな質問が出る。

《考察》

昼食後(1時25分から2時55分)の90分という時間。生徒は眠いのをこらえていた。さすがに眠る子はいなかったが、眠らないような変化に富んだ授業の工夫が必要であることが分かった。聞かせてばかりでは眠ってしまう。明確なテーマや目的で、体を動かさせたり、作業をさせたり、話し合いをさせたり、興味ある話題やテーマを提供したりしなければ持たない。90分という授業は準備と工夫が必要であることが分かった。昼からの科目で差し支えないものは、45分ぐらいの柔軟なカリキュラムを組めないものであろうか。そうすれば、時間に変化が出て、眠くはないと思う。

3月31日(金)

私たちはスーツケースをまとめると、副校長のワンダ・フェルナンデス先生が迎えに来た。

第2時限

建築 House construction II

Greer先生・Middleton先生

建築現場まで出かけて行って見学。生徒は学校からスクールバスに乗せられてきた。

全くの本格的典型的な設計の木造住宅。学校独自でオークションにかけて販売する。

2年間の総合的プロジェクト。House construction Iで基礎を学んだ後、実際に資材を買って家を建てる。ふざける問題生徒にはさせない。

ワンダ・フェルナンデス副校長先生との話し合い

管理者としての仕事を聞く。職員の確保、複数で教員の勤務評定をすること、生徒指導など。

カリキュラムについては、生徒が自己の進路に合わ

せて、それに必要な教科を選択し、生徒自身がプログラムを組む。それを決定するための一覧表がある。

教科は、記述と数値との最終評定。記述はあらかじめインプットしておき、それにあうものを組み合わせるといったやり方を取る。

教師評価については、形成的評価シートと形成的授業データ分析シートをもらう。授業のあるべき手続きが書かれてある。後で参考になるかもしれない。

第3時限

Pam先生 Senior Project

英語のコースの延長としてPam先生が担当するSenior Projectの生徒8名に聞く。

1) テーマ

実験や体験や作品など。テーマは自分で探す。

ムエタイ、ストレス、コミック、ローカルニュースペーパー、ナチュラル・ヒーリング、キリスト教と仏教、ドラッグユースの防止など。特にその方面に進むというのではなく、そのときどきの興味に従っている。

2) 手段

インターネット、手伝ってくれる地域の人、雑誌、父親、体験など。

3) 評価

5人の評議委員(先生2人、地域の人3人)

対象 スピーチ、体験活動内容、レポート

4) 担任

2回原稿提出。1回はチェックする。最後は成績をつける。

5) 取り組み上の問題点

11年生までは先生が教えてくれたけれども、これは、何もかも自分でやれと言われて、最初戸惑いがあった。しかし、新しいことに挑戦するということは大切なのでやっている。(生徒の答え)

《考察》

[卒業課題について]

テーマを聞くと、興味本意であり、必ずしも自分の専門に結びつくというでもない。高校生レベルで、テーマはほとんど地域や生活に根ざしたもの。

意外なのは、書籍で調べるといったことばかりではなく、体験やインターネット情報や雑誌(最新情報)など、最新情報手段を活用したり、地域の人々の協力を得ながら学習したことをまとめようとしている。

コンピュータを扱うことに対しては下地があって問題がない。

図書館の支援は、メディアスペシャリストがしてくれる。書籍の提供だけではなく、インターネット検索の場の提供や、発表時のプレゼンテーション作成上の支援である。地域の人々の協力も大切。

[学校教師の役割]

教科指導に専念することが求められている。また、生徒は、学力面で自己が向上することを要求されている。制度や環境づくりがそうした目的に対応している。

家庭訪問や生徒相談や成績・出席処理など、すべて専門のスタッフが存在する。成績出席処理・管理は事務局である。家庭訪問はソーシャルワーカーの仕事であり、相談はカウンセラーがする。

教師の使命は、自分の教室をいかに学習にふさわしい環境づくりにするか、学習にふさわしい機器をそなえ、授業準備をして、授業前に生徒を迎え入れる。管理者の評価は、教師の授業のよしあしという一点である。そのため、教師は厳しい授業評価が求められることになる。教師は、生徒に厳しい授業態度を要求するであろう。教師と生徒の互いの厳しさの中で学校教育が成立している。

[カリキュラムと能力主義]

授業も生徒の学力に応じてクラス分けがなされ、必修科目のコースについても、程度と目的に応じたグレードが設けられて、生徒は自分に合ったコースを選択する。能力の高い生徒については、より高いレベルの授業が受けられるようになっているし、大学の単位取得も可能である。

また、選択科目がたくさん作られていて、アチーブに縛られない科目が生徒の息抜きになって学力本意からくる軋轢の潤滑油になっている。

[教師・生徒への支援]

教師を支え、支援するのは、教科指導に関しては管理者であり、出席・成績処理に関しては事務局であり、資料的には図書館のライブラリアンである。

特にそうした中で、図書館の主な仕事は、読書指導ではなく、カリキュラムを質的に支援することである。

生徒を支えるものは、カウンセラーやソーシャルワーカーやリソースティーチャーの仕事である。

[自己責任と厳しさ]

すべて一人一人の生徒の責任で、コース選択や科目

選択がなされて、カリキュラムは生徒自身が学期初めに申請し、生徒の納得のいくシステムになっている。

そうした中では、生徒は自分の能力を知って将来への目的意識を持つことが不可欠になる。また、何事も自己の責任のもとに行動しなければならない。

生徒は自分にあった進路決定を迫られ、そのために様々なテストツールが用意されていて、自己を知る目安となり、将来が決定づけられる。

生徒をとりまく環境には、様々な誘惑や罠が待っているが、自己の責任と自制力で振り払うことが要求される厳しさがある。たくましさは助長される反面、さまざまな問題が潜在している。いじめは存在するし、生徒の不満もあるし、自己のプログラムの不備や能力不足からくる不満は皆無でないし、精神的身体的な障害や将来の不安や精神的なストレスも皆無ではない。そうした支障の解決のためにさまざまな支援が考え出されている。

[教師評価]

教師は授業改善が絶えず求められている。授業に無能な教師は辞めざるを得ない。また、授業改善のために、リニューアルのシステムもできている。大学の研修施設や州の研修施設がそれを支えている。授業中心のこと細かい形成評価システムができていて、管理主義ではあるが、きわめて民主的である。

管理者は管理者で、視学官によって管理されている。

[日本との違い]

日本では予算が縦割りにになっているために、コンピュータや必要な教育機器が特別教室（視聴覚教室や情報実践室など）に格納されている。予算面がそうした場所に集中して配分される。そのために、一人一人の教師がそうした施設や機器を自分の教科の中で常使用できる体勢にない。したがって、国語科などでコンピュータをそろえるということは出来ない。また、教師自身もそうした面での刺激はないので、黒板で教科書を教えることはできても、より発展的な活動のために恒常的に機器の使用をするということとはできない。

また、日本の40人学級という制度では、生徒一人一人の能力や進展に合わせた指導が出来にくいので、全体的集团的訓練的な管理や指導が効果的に求められている。

さらに、教室まで教師の方から出かけていかなければならないから、教室に掲示物はあっても、学習環境

を整えにくい状況にあるし、各クラスの構成に規制を受けることになる。

教師の教科指導能力以外に、生徒指導管理能力がないと、教科指導もできないという状況がある。

日本の教師評価は、学校教育活動のすべてに関わる面での能力を幅広く縦割りに評価することになっている。教科指導、生徒指導、校務分掌、特別教育活動などで、授業面での能力のみではない。

[授業に参加して]

スモーキー・マウンテン・ハイスクールには、多大の迷惑がかかったことを後悔している。学力を上げる大事な時期であったからである。しかし、せっかく授業したのであるから、そこから何かを提示してあげなければ悪いと思う。

最初、薄々感じたことがある。生徒は、日本語を言っほしい。聞きたいという要望があった。これは私が英語が下手であるのを知って、私に無理せずに日本語で言えという理由もあろうと思う。

私がコンピュータの授業参観をしていたとき、授業の終了間際に、一生徒が私の手帳の日本語の文字に興味を持ったので、私がホワイトボードを使用して、日本の仮名、平仮名、漢字の3種類があることを教えると、他の生徒も集まってきて熱心に聞いてくれた。

また、生徒規則はどうなっているかという質問があった。普段自分たちを縛っているルールの正当性を求め、日米で比較して納得したかったのであろうと思う。

生徒の日本に対する知識は、我々がアメリカに対するのと同様、乏しいものであることが分かった。たとえば、芸者はいるか。少なくとも鳴門市内に本物の芸者がいるとは思えない。フェアビューの小学校のインターナショナルデイにおいても、小学生が芸者の格好をしていたので、日本に対してそういうイメージを持っているのであろう。

アメリカのその生徒の関心は、一昔前のアメリカの成人の関心をそのまま反映しているものと思われる。日本人の文学の中で美しく描いた作品や映画作品や京都などに観光に来た外国人の印象などが反映しているのではないかと思う。

芸者についての質問は意外で、勉強不足であった。私自身、芸者の生き様や時代による芸者の制度の変遷がよく分からなかった。芸を売る商売であると聞いている。どのように答えたらよいのか、今後の課題である。

また、スモーキー・マウンテン・ハイの校長先生との会話の中で、日本はハイテクが進んでいるという知識から、日本は、どこの学校もインターネットの設備があるかという質問があったが、まだほとんどそうになっていないと答えた。教育の重要ポイントは、機器ではなく、人と人、心と心であるという意見を言ったら、同意してくれた。インターネットの設備もないことはないが、日本の縦割り機構が説明できなければ理解されえない。

異文化理解に関しては、あらかじめ指導命題を持っていった。それは次の通りである。

— 生徒が、物事を自分の知識としたり、積極的に考えていくためには、意外性であったり、比較できるものが自分にあたり、与えられたりすることである。

したがって、教師は、指導手段として、テーマにつながる題材やデータを選択して、意外性や比較意識に訴えながら興味深く指導することである。—

授業を実際にやってみて、以上の仮説から意外だったこともあった。

桜の写真を見せたとき、生徒はどの花かが分からないので、季節も分からないということであった。生徒にとって、比較すべき材料が多くあるので、逆に比較すべき事柄が障害になることもあるということである。ノースカロライナでは、春の季節は特に開花する木の花の種類も豊富であり、春の花を一つに焦点化するという伝統がない。

日本では、「花」と言えば一種類に限られてしまうという特殊な文化を持っていることを理解させる必要がある。

今回の教育視察は現象学的な立場で観察しようという構想を持っていたが、あらためて、ドクサを持っていて気づかなかったことがあった。桜の花というドクサである。日本人の心に根ざすものが強くて、日本文化を伝えようとして指導者が気づかなかった点である。

クリスマスは正月と類似のものとして、理解の尺度として十分使用できる。

意外性については、意外なままでは自分の知識にならず、その意外性が理解され納得されて感動を与えることがある。意外性を用意して、その質問を予想して答えを用意しておくことが大切である。

看護コースの授業で、なぜ、病人には折り鶴なのか、という質問が出た。これが説明できないことに

は、折り鶴を出しても意味がない。「鶴は先年、亀は万年」でこれらは長寿でめでたいという説明をすると、納得した。後で、男子生徒の数人が折り鶴を学びたいと申し出てきた。また、放課後、図書室にいた女子生徒が折り鶴がよかったと言ってくれた。折り鶴を出したのは効果的であった。

また、指導計画の内容に一部問題もあった。日本人は遠慮して、病気がよくないにも関わらず、気分はいいですよと言うことがあるという説明で、生徒は一斉にそれはナンセンスだと言った。これは誤解の解きようのない提示内容で、説明に窮することがらである。一連の長い入院生活であるから、それ以上病状はどうにもならないというあきらめや儀礼的な発言であることを言わなければならない。それに、悪いものは悪いと医者に訴えることはどこも同じであるから、出すことに問題があったと思う。

「遠慮」の習慣は、日本人間でもときどき誤解があるので、典型的で教材選びを慎重にする方がよい。要するに、論理が明快なものに限る。

男子生徒が帽子に「虎」という漢字が入っているものをかぶっていて、これは何の意味かと訪ねた。長く持ち続けた疑問が解けた喜びというものがあることを知った。「虎」を説明するだけでなく、「とらかんむり」という部首の提示とそこから派生する漢字を教えることが効果に結びつく。

学校の教師の地位のことであるが、「学校の先生を尊敬する習慣について」の質問が出た。教師からの発問による。これは、アジア、特に中国の古代の偉人達の逸話を学ぶこと自体が教育であることに起源がある。師弟という関係において尊敬の念が成り立つということである。これなども生徒に納得された。

前述の指導命題は修正しなければならなくなった。

4月3日(月)

Exploris Middle Schoolの訪問

チャータースクールである。

私立1985年創立。

1996年にチャーターの認定を受ける。

博物館と併設。博物館の教育部門である。

博物館の職員・教員が指導する。

特色

- 1) 卓越した学校をめざす。
- 2) 教育的実験の場である。

3) 州の他の教師に対するデモンストレーションの機能を持つ。

4) グローバル市民をめざしている。国際理解教育をしている。

学校のあり方は今模索中である。大学機関には頼っていない。3年目で全学年(6~8学年)がそろい、ようやく体勢がそろってきた。

生徒数は、168人で小さな学校(平均は800~900人程度)である。

ちょうど青春初期に焦点を合わせる。

カリキュラムは州の学習指導要領に準拠することから免除され、独自のプログラムで学習する。7年生では、世界について自分で課題を与えて学習するといった風に。

成果が出なければ認定を取り消される。5年に一回チャーターのチェックを受ける。

50%は教員免許を持たない。教師の自由裁量が認められている。

スペイン語、フランス語など、これらは日に1.5時間。1クラス14人~20人ぐらいに教師一人。

朝、全学年の生徒全員・全教師が今日一日すべてのことを話し合う。ガイダンスである。

数学は一教科として午前中の頭のはっきりしている時間にする。毎朝ドリルを厳しくする。

グローバル・アートとして、外国語(フランス語やスペイン語)を学び、その中で国際教育もする。手段として、子供にみあった社会的関心事を総合学習する。テーマ学習である。

数学は教科として扱うが、他は統合された時間で学ぶ。午後はプライムタイムとして生徒と一对一の学習。

国語のスペルや文法のできが悪いときは、ミニワークショップを企画する。教師が必要なときに企画。

テーマ学習であるが、たとえば、8学年のテーマ学習で、ピギニング・オブ・ソサエティというタイトルで、

アメリカの起源、歴史

科学の起源、進化論

学校の起源、今後の新しい学校

の三つのテーマ学習をするが、どれを特にするかを子供が決めることが出来る。教師は見えないところで支援する。基礎的なことを大切にしている。

その他、

1) 批判的に考える。

2) 自立した学習者。

3) 積極的に様々な人々を考えられる世界市民。

この三つを自主的に考えられるようにしている。

活動の評価については、年に4回家庭に報告する。

まず、生徒が自己評価を行う。自分のノートに目標を書いておく。2週間後どういう風に反省、自己評価するかである。うち2回は、教師の評価で、チェックリスト方式で生徒のスキルなどを評価する。項目は行動で書いてある。

1) Communication 伝達能力

2) Personal development 個人的発達

3) Functioning independently 自立性

4) Problem solving 問題解決能力

5) Theme work テーマ学習

以上をチェックして、親に送る。親の認めのサインがいる。8年生は充実。6年生は簡素。親は質問し、子供は答える。教師も答えられるようにする。

また、ポートフォリオ方式と言って、年に2回生徒が先生と親との前で自分がどんな学習をしたかを説明し、アピールする説明の場を設ける。

したがって、評価は、チェックリスト、ポートフォリオ、2ページぐらいの総合所見の3つである。

助成金は、州・カウンティから一人当たり5,000ドル出ている。

この学校への入学希望者は誰でも受け入れるが、定員の関係で抽選。入学希望者が多く、抽選なので、学力差がある。23%がなんらかの学習障害を持つ。25%が英才である。多様なニーズに応えている。

両親が学校を選択しているが、学校に不足するものがあると知りつつ、生徒を送っている。

5年間契約であり、学校の評価については、チャータースクールに照らして州の査察がある。

親が子供を他の学校に変わらせていないことで評価できる。親との意見交換や親との会もある。

評議会で学校の方針を決定する。

所見を書くため、一人の教師がプライムタイムで一人ずつ話し合うと、生徒14人であるから14時間が必要になる。生徒60人を教師4、5人です。一人の教師が何人と決まっているのはプライムタイムの時だけ。

スクールカウンセラーは教師がするのでない。

事務的なことはエクスポリスです。深刻なケースは外部に委託する。

州のテストは受ける必要はない。しかし、州のテスト、読み、書き、算数、コンピュータ（ベーシック）は受けている。

教師の評価は自己申告。同僚評価、チームや幹部評価はまだ。今考えているところ。

生徒のテストは、州でもトップ10に入っているが、それより、一人一人の伸び率を期待する。

《考察》

アメリカには、教育に対する様々な試みの一つとして、チャータースクールの制度がある。州の学習指導要領を離れて教師の自由裁量による実験学校がある。州がそうした存在を認めているところがよい。著しい成果は他の学校のモデルとなるからである。

教師がカウンセラーを兼ねて専門がないのは日本的である。少人数でこじんまりと学校を開くとそうなるであろう。アメリカ式学校のスリム化である。

ベーシックを重んじ、総合的に学習を進めて行くところやグローバルな視点での取り組みや生徒が自己評価をしながら学習を進め、教師や両親にアピールするというところに特色がある。

博物館という教育財産をベースにした学校環境の利点を生かしている。おもしろいと思うが、教員免許のないスタッフが50%いるのは新鮮味を感じても危なかしく、暗中模索の感がある。

州教育委員会訪問

教育長さんは不在であった。名刺をもらう。教育方針の説明を受ける。

テクノロジーに対する理解・技術を習得させている。幼稚園から高校までスキルを学ぶプロジェクト。高校になる前、8学年の州のテストにコンピュータのテストあり。教員免許を取る際にもコンピュータの技術知識がある。インターネットを適切に利用して学習する。教師用、生徒用、保護者用の委員会のサイトがある。

教育に関する定期刊行物は1,100種類ある。

教育計画には、すべての関係者を巻き込むことが大切。新しいABCs計画（The ABCs Plus）も、親、教師、大学、諸団体などで構成。

ABCsはほとんどの教師も知っているが、The ABCs Plusについては、知らない教師もいる。

ABCは成果があった。アチーブで成果があった。全米をリードしている。大統領やメディアからも高い

評価を受けた。ABCや州のテストの方針について反対する人もいる。選択式で、どれほど伸びるかを見るものであるが、親にはプレッシャーがあるためか。

基礎的な事項を試す。生徒のしたことに責任を持たず。Student Accountabilityである。

ABCsの前はそれぞれの学校がどんな問題を出していたのか分からなかった。95、96年より始められた。前年度の成績との伸び率を求め、予想よりも10%高いところが優秀。50%の生徒が達成できない場合、low performance school と呼ぶ。

達成した場合、教師には7,500ドルのボーナスと全ての生徒に1,500ドルの褒賞金。

達成度の悪い学校は、州よりアシスタント・チームが派遣される。場合によって校長が失職することがある。

未達成校が123校、93校、78校という風に減ってきている。成功しているが、あるところで見直しを図られる。伸び率は達成率ではない。

人種間格差が著しい。原因は何か、何をすればよいか問われている。しかしながら、基準を満たしていても学年をあげる、つまりsocial promotionをなくすように、州が介入して、基準をしっかりとあげる。その方法として、

低学力に対する支援。

子供や親に責任を持つことを強調。

学力診断で3回のテスト（再テスト、再々テスト）をする。

Gateway 4の高校の場合は、2003年より代数1、歴史、経済、法律、生物、英語で、学年相当に達していなければ卒業できないようにする。

多額の資金を与えて補習する。

以前は学力指導が十分ではなかった。これまでの方針で成果が上がった、など。

《考察》

多様な人種を抱えていながら、学習本来の実質的成果を問うという教育本来の姿を見た。州がテストをして基礎力をチェックし、social promotionをなくすというのは、驚異的な教育改革である。

これまでの道のりには、さまざまな要因が必要であったであろう。

- 1 州自体がもともと教育熱心であったこと。
- 2 高度な問題意識を持った教育機関の幹部が存在

したこと。

- 3 それを取り上げる民主的な場と説得手段が持てたこと。
- 4 多くの階層との関わりで改革に乗り出したこと。
- 5 学習の伸び率に着目し、広域にわたる膨大な情報処理が可能であったこと。
- 6 教室が純粹に学習指導の場になっていて、学校

本来の目的が明瞭であったこと。

- 7 政策をすっきりした形、ABC s にまとめられ、人々にアピールできたこと。
- 8 トップダウン方式で、能力主義が学校評価、教師評価にも反映していること、などではないであろうか。